

氏名(本籍)	おかだ 岡田	すすむ 晋(東京都)
学位の種類	博士(学術)	
学位記番号	博乙第709号	
学位授与年月日	平成3年7月31日	
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当	
審査研究科	芸術学研究科	
学位論文題目	コミュニケーション環境と環境像の研究	
主査	筑波大学教授	嶋田厚
副査	筑波大学教授	下山真司
副査	筑波大学教授	増成隆士
副査	筑波大学教授	山口勝弘

論文の要旨

本論文は現代のいわゆる情報社会にまつわる諸問題に、有効に対処するために構想された新しいパースペクティブの提案である。

永年にわたり、映像の分野をグラウンドとして、コミュニケーションとメディアの分析と批判に関わってきた著者は、現在進行する社会的コミュニケーション過程におけるドラスティックな変化の中に、必ずしも歓迎できない局面の進展を憂慮し、この事態を明確に把握するには、従来のコミュニケーション論の枠組を超えて、より包括的で、しかも人間学的視座に立つ新しい方法論的視点が必要と考え、「コミュニケーション環境」と「環境像」という2つの基本概念に集約された仮説を提案する。「環境をコミュニケーションとイメージという、人間の側から見直すのが、研究全体の主題に他ならない」と著者自ら要約している。

構成は4部で仕立てられ、前後に序章と終章が付されている。しかし、内容的には、大きく2つに分けられ、「研究の視点と方法」と題された序章と、「コミュニケーション環境論的基礎」の名の下に3章で構成される第1部が、本論の基本的仮説となる方法論の理論的展開に向けられ、第2部以降第4部までが、この方法論の現実への適用のパラダイムとして歴史的な文脈の中にその展開を試みたものとなっている。この手答えの許に、今日の情報社会の分析への姿勢を示しながら、問題点の抽出と将来の見通しに触れた短い終章を添えて、著者は論を結んでいる。

以下、順を追って示せば、先ず基礎理論の提示に当る序章において、「環境とは基本的に人間および人間関係の場」であって、この「環境を解釈する決定的要因こそ人間のイメージである」とする立場の宣明にはじまって、そこからメディアとメッセージを切り離して考える従来のコミュニケー

ジョンモデル(シャノン・ラズウェル, およびオスグッド・シビオク)を批判し、「コミュニケーション環境」という概念は、発信者と受信者、メディアとメッセージを環境という全体において統合的に捉えるためのタームであると主張する。ここでは、「われわれをとりまくすべての物、環境を構成するすべての物はいずれもメディアであり、物を通して与えられる世界の意味は、環境像に至るメッセージ」となる。著者はさらにメディアを自然的なものから人工的なものへ、4つのカテゴリー(1)言葉・画像・文字、(2) 道具、(3) 物的構成物、(4) 環境装置)に分け、分析の便宜のための図式を示している。

第1部第1章「環境の構造」は、序章を受けてさらに考察を深め、アルチュセールのイデオロギー論への共感から、コフカとリップマンのそれぞれ代表的な環境論を批判的に取り入れながら、<私>を同心円として取り巻く、3つのレベル、自然環境、社会環境、家庭環境という構造仮説を呈示する。そしてこのそれぞれのレベルを通貫する情報について触れ、メルロ＝ポンティを援用しながら、情報処理の原点として知覚の重要性を指摘しつつ、さらに、サルトルを加えて、イメージの持つ文化創造性を強調する。すなわち、イメージこそが、人間の内部を物的装置、環境において投射され、外化され、社会化されるものであるから。

第2章「コミュニケーションと環境」においては、コミュニケーションを社会関係において、あるいは私と他者という人間関係において、フロンの鏡像の研究やヤコブソンらを引きながら再考している。ここでは、私＝他者関係による主体の相互形成、およびイメージの共有あるいは社会化が特に注目されている。

第3章「イメージと環境」においては、前章で引かれたソシュールの延長にありながら、その射程をさらに超えたところで展開されたレヴィ＝ストロースの「具体の科学」が中心に論じられる。「具体の科学」で最も関心を引くのは、物と言語の間に生れるイメージの働き、具体的なその意味作用であると著者は言う。レヴィ＝ストロースの分析が正確であるならば、「言語から論理が生まれたのではなく、具体への関心がイメージを通して言語的論理を発達させた」と考える著者が、序章で「環境を解釈する決定的要因こそイメージである」と述べたのは自然である。この章もまた、序章の深化と細説をなしている。

第2部以降は、これまでの基礎理論の応用としてその有効性を計るとともに、また、具体的な例証による基礎理論の補強として、メディアの変化とそれに伴うメッセージとイメージの展開を通時的に跡づけている。ヨーロッパを中心とした歴史的記述ではあるが、その基礎にイメージの共時性を常に意識した、と著者は断っている。第4章「環境へのイメージの投射」では旧石器時代の洞窟画、第5章「文字と象徴・環境の解釈」ではエジプトの象形文字、第6章「装置環境としての都市」ではギリシャのポリス、第7章「空間思考と環境媒体」ではキリスト教修道院とカテドラル、第8章「透視画法の意味作用」ではゴシック空間と遠近法、第9章「環境における主体の認識」では自我像、第10章「技術社会の媒体機能」では写真、第11章「媒体のダイナミズム」では映画と、それぞれを中心に、単なる事実の記述ではなく、メディアとコミュニケーションとイメージとの統合的な関連をパラダイムとして、適切に選ばれた文献を利用しながら、密度の高い考察を試みてい

る。

「本研究の問題点とその展望」と題された終章は、これまでに著者が新しく構成してきた「コミュニケーション環境と環境像」の理論を一つの鏡として、現代の情報化社会に向けるとき、そこにあるようなズレや歪みが生ずるのかの短い省察である。ここでの著者は、どちらかと言えば、現代のコミュニケーション状況の方に歪みを見出し、それに対する異和感と憂慮を隠そうとはしていない。巨大なマス化の流れによって、環境よりも反って環境像が優先するようになった事態、そして、テレビとコンピュータというメディア技術が人間という主体を通り越そうとしているという事態が挙げられているが、現代への関心がこの理論構築の動機の一つであったことを、著者はすでに序章で述べている。

審 査 の 要 旨

これまでのコミュニケーション研究は、実証的ないしアカデミックな態度を保持しようとする場合、えてして、限られた範囲でのいわゆる情報伝達、あるいは言語記号というメディアを中心に行われてきがちであった。

もちろん、言語以外のコミュニケーションの存在について疑う者はなく、また、コミュニケーション過程というものが広大な社会的文化的文脈において行なわれている事実を否定する者もなかったが、しかし、環境のすべてがメディアになりうるという立場でコミュニケーション過程を包括的に捉えようとするのは、一人の研究者にとって、あまりに大き過ぎる主題と考えられていた。

本論文の著者、岡田晋氏は、敢えてこの望まれてはいたが、極めて困難な課題に挑戦し、永年の思索と博搜した文献を生かして、理論的考察と歴史的研究を有機的に組み合わせた総合的なコミュニケーション論をここに展開した。

その基礎理論において、あくまでフランス語圏の伝統的な人間学的立場に立って、コミュニケーション活動の原点を人間と文化に置き、錯綜する多様なアプローチを批判的に取捨選択して統合化を図った努力は深い共感を呼ぶものであり、それに加えて、そのパラダイムの検証も兼ねるという高度な配慮を籠めて、多面的な文化現象—一般には、人類学や美術史、建築史、技術史等々の個々の文脈で考察される—を一貫した通時的視座で密度高く考察した部分は、本論文において、最も高く評価される場所である。

ただ、理論構成において、依據した資料が著者が恐らく永年親炙したものに限られ、フランス文化圏以外で発展した、氏の理論にとっても有益と思われる文献、例えば、自然史や生態学、あるいは広義の認知科学に見られる成果などについて参看が見られなかったこと。また、終章で簡短に触れられたテレビや、コンピュータ等の最新技術についての、立入っての内在的吟味の欠除等は、惜しまるべき弱点と言わねばならない。氏が通時的な文脈で論じたパラダイムは、それぞれ、その時点でのいわば顕著で特化された局面であったが、これも氏の指摘どおり、それらはすべての連続的に重層し、現代においては特化さるべき先導的技術の背後に、相互に関連し合って存在しているは

ずである。

著者の望むように、ここに提起された理論をもってその部分的弱点を補強して、現代の問題に対し、本格的に取り組まれることの一日も早からんことを期待する。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。